

島根大学医学部6年 岩切 由佳

公立雲南総合病院での実習では、本当に様々な経験をさせていただき、とても内容の濃い5日間でした。大学では絶対に行えない実技の面から、教科書には載っていない実践的な知識の面において広く学ぶことができたと思います。特に実技に関しては、色々な経験をさせていただき、研修医になる前の良い勉強になりました。地域の中核病院ということで、症例も大学とは異なり生活に根差したものでありましたが、そう大きくは変わらないという印象で、大学と変わらない医療を提供されていました。ただ、決定的に異なるのは、医師の数です。各科の垣根を越えて幅広く何でも診なければ、この医師不足に対応することができません。医師数が少ない為に必然的に激務となり、医師が離れてしまうという悪循環の中で、志の高い先生方が自分の身を削りながら働いておられる姿は、今後私がどのような所でどのような医師として働くべきか考えさせられました。

この医師不足から来る地域医療の現場を、少しでも改善できるのは私たち若い世代です。自分の将来像をもっと真剣に考え、どうしていくべきか、どうすることが患者さんを始めた地域の方の皆さんの幸せに繋がるのかを、しっかり考えなくてはいけないと思いました。

また、この実習の中で痛感したのは、医師が少ない分をコメディカルの方々が補っておられるということでした。患者さんの治療は医師の仕事かもしれませんが、患者さんの入院中のケアをはじめ、簡単な処置や、退院に向けてのリハビリ、退院後の自宅に戻ってからのケアまで幅広くコメディカルの方が担っておられました。医師が担当部分はほんの一部であり、あとの大部分は他の職種の方々の細かいケアで成り立っているのだということを知り、“チーム医療”という意味が初めて本当の意味として理解できました。

一緒に働くコメディカルの方への感謝の気持ちと、この地域医療の置かれている危機的な現実を忘れることなく、来春から始まる医師としての第一歩を踏み出そうと思います。



透析室での実習の様子



リハビリ実習の様子



実習を終えた研修生には、大谷センター長から「修了証」を交付しています。

「地域医療人育成センター」からの お知らせ

当院では、医師、看護師を始めとする地域医療を担う医療職を育成することを目的に、「地域医療人育成センター（センター長：大谷 順 副院長、副センター長：須藤一郎 診療局次長）」を昨年4月から開設しております。このセンターでは、独自の研修プログラムを作成し、島根大学医学部生の研修や、高校生・中学生等の体験セミナーなどを開催しています。

今回の紙面では、センター事業の一環として取り組んでおります、島根大学医学部6年生による「地域医療実習」の様子や、実習に参加した医学生の感想を紹介させていただきます（今年度は、4月から7月の期間に計25名の医学生の方が、当院での実習に参加されました。今回、その内2名の感想を紹介します。）

■ 公立雲南総合病院での「地域医療実習」の感想 ■

島根大学医学部6年 森本 彩

今回の、公立雲南総合病院での実習におきましては、先生方や看護師、技師などのコメディカルの皆さん、患者さんや事務の方々に温かく接していただき、楽しく実習することができました。

地域医療実習を行なう前は、「地域医療」に対し明確なイメージを持つことができず、医師不足やそれに伴う医療崩壊などの問題点を深く理解していませんでした。しかし、雲南病院での実習を通し、それらの問題点を肌で感じるすることができました。また、地域医療を行なう上で重要なことが理解できました。例えば「チーム医療」と「総合的な診療能力」です。

1つ目の「チーム医療」に対する重要性は、リハビリ実習や訪問看護の実習で学ぶことができました。医療はチームで行なう以上、チーム内のスタッフの役割をお互いが理解する必要があります。お互い、何が専門で何ができないか知っているとお互いの足りない部分を補い合うことができ、それが医療全体の質を高めてくれます。今までの大学の実習では、主に医師が行う医療の部分しか見てきませんでしたが、今回の実習で、医師による治療後の患者さんを、病院やご家族、施設で誰がどのように支えているかを知ることができました。特に地域では医師以外のスタッフの支えが大きく、ますますコメディカルの方への尊敬の気持ちが強くなりました。

2つ目の「総合的な診療能力」については、医師の専門分化が進む中、地域では何でも診れる医師が求められていると感じました。1つの分野を究めるのも素晴らしいですが、医師になる以上、全ての患者さんを治療できるようになりたいと思いました。

雲南病院における実習においては、大学ではできない様々な手技をやらせていただき、大変勉強になりました。